
琳々と篤翼

山内 詠

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

琳々と篤翼

【Nコード】

N1265Q

【作者名】

山内 詠

【あらすじ】

慶国からやって来た黒髪の女官琳々と真国の軍人篤翼。二人を繋ぐものはただ主と共に旅をしたわずかな時間だけのはずだった。しかし真国で再会した二人の距離は徐々に縮まっていく。作者別作品「木蘭の涙」番外編。

はじまり（前書き）

作者別作品「木蘭の涙」番外編です。
内容が重複する部分があります。ご了承ください。

はじまり

金色の髪に褐色の肌をした異国の兵。

黒い髪に象牙色の肌をした女官。

多分お互い、最初の印象などそんなものだった。
ただ見てすぐに解る身体の相違に興味を引かれ、言葉を交わした。

きっかけは素っ気なく些細な出来事。

陽の光に透ける小麦色の髪が美しすぎて、琳々^{りんりん}は目を離せなかった。
しかしじっと見つめることはあまりにも無遠慮である。
だから琳々はなるべく悟られないように、そろりそろりと窓の外を見やった。

馬車と平行して馬を走らせているのは、篤翼^{とくよく}という名の軍人である。
大陸の西の、端の端。小さな部族の集まりから始まったという真国から木蘭を迎えに来た王の名代。

男の人は、ああもたくましいものなのか。

自分とは異なった容姿と共に、ひと目で鍛え上げられているとわかる身体と雰囲気を持つ彼は琳々が今まで見たことのない種類の人間であった。

琳々は慶国の後宮で第四王女木蘭に仕えていた。

そして今、主である木蘭の輿入れに付従い真国へと旅をしている。

そもそも後宮で男性と顔を会わせることはかなり少ない。

男性そのものが主たる慶国王以外ありえない世界なのだから。

琳々は女官ではあったが、木蘭に仕える唯一の存在として下女がやるようなことまで全てこなしていたから男性に会う機会が皆無ということはなかったが、数少ない機会に会う男性はいつも決まった顔ぶれ。

慶国王は貫禄と品格は持ち合わせていたが、同時に贅もその身に貯め込んでいたし、後宮に仕えることが出来る男性はある程度の年齢がいったものか男としての生を放棄したものしか許されていなかった。

だからすらりと伸びた背に締まった身体を持つ若い男性を見ることが初めてに近かったのである。

「私のような者が珍しいですか？」

精一杯隠れていたつもりであつたのに、どうやら篤翼にはばれていたようだ。

休憩の際水を取りに馬車から降りたら、突然声をかけられた。

相違する容姿も確かに珍しかったがただ今正に人生の盛りを迎えている男性が眩しかったなどと、どうして言えよう。

琳々は最初は真っ赤になつてうるたえたものの、ひとつ深呼吸をすると逆に問い返すことで平静を装った。

「真国の方はみなあなたのような容貌なのかしら？」

慶国ではほとんどが黒髪に黒い瞳、肌は白に近い象牙色である。

真国からのやって来た一行は篤翼だけでなく皆褐色の肌に小麦色の髪をしている。

「いいえ、そうとは限りません。一番多いのは私のような髪と肌ですが、黒髪のものもありますし、赤髪の者もありますよ」

「赤！ 想像もつかない！」

「真は元々別々であつた12の部族がまとまってできた国ですからね。色んな民がいます」

「一番多いということは真国王陛下も、あなたと同じようなのでし
ようか？」

「同じと申し上げるのはとても恐れ多いのですが、真国王陛下は金
の髪に香緋色の肌であらせられます」

「香緋？」

聞いたことのない単語に首をかしげると、篤翼は少しだけ眉を動か
してああ、慶では飲む習慣がないのでしたねと深い赤の混じった茶
色ということですよと言ひ直した。

「香緋とはお茶の一種でとてもよい香りがするのです。葉ではなく、
種を炒つた物を煎じて飲みます」

「是非木蘭様に差し上げたいわ！」

「では次の休憩の時に持ちしますよ」

篤翼はすぐに請け負ってくれた。

茶色の瞳が優しく細められる様に、ざわり、と胸の奥が騒いだ。

「ありがとう！ー！」

また赤くなる顔を誤魔化すように琳々は笑った。

珍しいお茶は辛い旅路の慰めになるだろう。これは木蘭様にお教えしなくては。

本当は木蘭に伝えるためだけではなく、胸騒ぎから逃げるために、琳々は足早に馬車へ戻った。

取りに出たはずの水を忘れたのに気づいたのは休憩が終わり、馬車が走り出してしまってからだった。

それから度々、琳々は篤翼と話をするようになった。二人きりであったり、時には従者も一緒に。

内容はこれから暮らすであろう真国についてである。

琳々は主である木蘭と共に、に広い大陸の東の端から西の端へと赴くのだ。それなのに今持つている情報はあまりに少ない。

木蘭は何も持たず追い出されるようにして祖国を旅立ってきた。

食べ物、着る物、住居の様子、気候の違い。女官として知っておかなければならないことは山ほどある。

だが篤翼との会話は必要に迫られての行動ではないと、すでに琳々は気づいてしまっていた。

時にふと綻びる表情。

差し出される荒れた硬い支えの手のひら。

ただ異国の人が珍しいから、若い軍人なんて見たことが無かったから。

そんなことは言い訳にしかない。

いつの間にか追っていた。目を離せなくなっていた。

たくましく、伸びた背中を。風に流れる小麦色の髪を。

しかし琳々は自分が籠の鳥のようにごくごく狭い世界で生きている
ということに自覚していた。

そしてこれからもその狭い世界が広がることは無いとわかっていた。
今篤翼に惹かれているのは、ただ初めて出会った”外”の男の人だ
から。

何も知らないでいるよりは、よかったと思おう。

この胸のざわめきは心の底に大切に仕舞っておこう。
どうせこの旅が終われば、彼ともう会うことは無い。

そう、思っていたのだ。

再会

遠くから呼びかけられた気がして、篤翼はふと後ろを振り返った。渡り廊下の欄干から身を乗り出すようにして、誰かがこちらに手を振っている。

風になびくまつすぐな黒髪を認めて、篤翼は慌てて手を振る人物の元へ走った。

慶国の王女に付き従って来た、女官の琳々である。

「やっぱり篤翼殿でしたのね！　ちょっと遠かったから、違つかと思ったのだけど」

「名を呼ばれて驚きましたよ。お元気そうで、なによりです」

琳々ははしゃいだ声で近づいてきた篤翼に話しかける。

屈託の無い笑顔は、一緒に旅した時のままだ。

慶国王女慶木蘭が王の妃と認められ真国王宮の西殿に住むことになったことは、すでに王宮中の者の周知の事実である。

だからこの場所、西殿に琳々がいるのは当然であつたが篤翼はもうこの女官と会うことはないだろうと思っていた。

なぜなら琳々の立場がずいぶんと変わってしまったからだ。

そのことに気づいていない琳々に苦笑しながら篤翼は告げた。

「王妃様の女官たる方が、私のような者に声をかけてはなりません」庭園にいる篤翼から廊下にいる琳々は見上げるような格好になる。

この距離が、ちょうどお互いの立場と同じくらいの距離だ。

篤翼の言葉が意味が理解できないのか、琳々は首をかしげた。またさらに、と黒い髪が揺れる。

「王妃様に仕える者は西殿の外にいる者とみだりに話してはいけないのです」

真国の王宮は大きく分けて5つに区別される。

まず王が鎮座する中央、官僚たちが行政を行う北殿、王宮の行事や祭祀を行う南殿、

成人した王族が生活する東殿。そして王の妃と子が住む西殿。

篤翼の本来の仕事は西殿の警備を行う近衛兵であった。

故に将来王の妃となる可能性のあった慶国王女の護衛を務めていたのである。

「西殿は王の妃とその子が住まう場所。

そこに仕える者が外部の者と接触しているのは あらぬ疑いを招きます」

ただし立ち話をしただけで、暗殺や不義密通の手引きをしているのではないかという

嫌疑をかけられてしまう。その相手が例え近衛兵であっても。

「ご、ごめんなさい！ 私ったら考え足らずで篤翼殿にご迷惑をつ

…」

青ざめ慌てて言い募る琳々を見て、ああ変わってないなと篤翼は思う。

初めて言葉を交わした時も、赤くなったり、笑ったり、表情がころころ変わる娘だった。

「次からお気をつけください」

略式の礼を取って去ろうとした篤翼の背中を、琳々の声が追って来た。

「では、どうすればあなたの御迷惑にならずに会えますか？」

篤翼は振り返り、言った。

琳々のまっすぐな瞳が、眩しい。

「侍従を通して正式に面会を申し込んでくだされば、可能ですよ」

その言葉に沈んでいた琳々の顔はまた笑顔で輝いた。

「では、そのようにします！ その時に、旅のお礼をお持ちしますね！」

琳々はきよろきよろと辺りを見回してからもう一度篤翼に向かって大きく手を振り、

礼をして、渡り廊下の先へ去って行った。

初めて言葉を交わした時と同じように楽しげに跳ねるような足取りで。

旅の礼など、任務として護衛しただけなのに。

本当に変わった娘だ。

篤翼の口元にしらず笑みが浮かぶ。

琳々は篤翼が知っている王宮仕えの女官の印象とは全く違う女性であつた。

木蘭の年齢が20歳ということであつたので、恐らく同じくらいの年齢であるうちに、明るい屈託の無い笑顔が年齢よりも幼い印象を与える。

丸顔にくりくりとしたつぶらな黒い瞳がそれを助長していた。

あの瞳をもう一度見ることが出来た。
そのことがなぜか嬉しかった。

面会の意味

「あの、近衛の方にお会いしたいのだけれど、面会の申し込みってどうすればいいのかしら？」

琳々に問いかけられた木蘭付きの女官小榮しょうは目を丸くした。

王宮付きの女官や侍女のほとんどは裕福な商家や中級以下の貴族の出身で、

12・3歳から出仕し始める。

ほとんどは5・6年勤めると結婚するために暇をもらって辞していくが、

小榮は今年22歳、辞めることなく勤めて10年。

ここ西殿の女官としては中堅の立場であった。

琳々の方が小榮より歳は若いが、木蘭に仕えている年月は比べ物にならない。

故に真国の女官たちからは年齢に関係なく琳々は先輩、という意味を込めて

「琳々ねえさん姐姐」と呼ばれていた。

「琳々姐姐、一体どこの隊の方に求愛されたんです!？」

小榮は興奮を隠しきれない様子で逆に問うた。

全く手の早い人がいるもんだわと呟いて。

「き、求愛って……何の話？」

予想外のことを言われて琳々は混乱しながらも訊き返す。

「何の話って……近衛の方に求愛されたんでしょう？ 面会はその
お返事するのかと」

「違いますっ！！ ただ、お世話になった方にお礼を渡したくて…」

その返答で小榮は面会相手をすぐに察した。

二番隊の隊長、香緋好きの篤翼だ。

篤翼が琳々とその主の木蘭が真国まで来る旅の護衛をしたということ
とは、

木蘭付きの女官たちは皆知っていた。

ならば相手が篤翼だということは、本当に求愛などされていないの
だろう。

「なーんだ、てっきりもうどなたかに求愛されたのかと思っちゃい
ましたよ」

あからさまにがっかりされて、琳々はますます混乱する。

「なんで面会の申し込みが求愛になってしまっの？」

本当に何もわかっていない琳々の顔を見て、小榮は苦笑しながら説
明してくれた。

近衛兵団の職務は王宮の警護並びに王都の治安維持・警護である。
警護を主とするため、実際の戦を行う軍とは危険度が全く異なる。
そのため近衛兵、特に王宮の警護にあたる部隊には
実践経験の少ない貴族の子弟が配属になることが多いのだ。

そして女官や侍女たちの多くは15歳前後の娘盛りである。
王宮の内に仕える女官たちと、その王宮の外を警備する近衛兵たちは
表向きには一切交流を持つてはならないことになっている。

しかし若い男と女が同じような場所にいて、煙が立たないわけがな
い。

なぜか昔から女官や侍女たちは同じ内に仕える侍従や官僚と結ばれ
るよりも近衛兵と結ばれることの方がはるかに多かったのである。

女官や侍女として出仕してくる者達の目的のほとんどは行儀見習い
という名目の結婚相手探しであつたため、監督する側も半ば黙認状
態であつた。

「正式に面会を申し込むってことは、二人の仲を公けにするってこ
とになるんですよ」

だから小榮は琳々にもう恋人が出来たのかと勘違いしたのである。

「じゃあ面会なんか申し込んだら、篤翼殿にご迷惑がかかってしま
うわ……」

やっと状況が把握出来た琳々ががつくりと肩を落とすと、

小榮は大丈夫と声を上げて笑った。

「だって相手はあの篤翼隊長ですもの」

篤翼は下級貴族の次男で今年31歳になる。

最前線での戦いを何度も経験しており、仕事ぶりは真面目で誠実。

そして顔も悪くない、となると騒がれないわけがない。

しかし今までどんな女から秋波を送られても、全く反応しなかった。生真面目に規律を盾にどんな誘いも断り続け、今や誰も声をかけようとしなない。

身を固めればすぐにでも大隊長どころか、連隊長にしてやる、と上司から言われたにもかかわらず、今だ独り身の変わり者。

実は篤翼は香緋好きと共に超のつく堅物で有名であつたのである。

琳々は新しい妃となつた慶国の王女に付き従つて来た唯一の女官というだけで西殿の中では注目的であつた。

そんな周囲の視線などものともせず、本来であれば女官のする仕事ではないことでも進んでこなし、

木蘭のためならばと労を厭わない姿は永く仕える主を持たなかつた西殿の女官たちの勤労意欲を大いに刺激した。

しかし献身的な琳々の働きぶりから木蘭は王女として慶国ではかなり冷遇されていたらしいことを小榮たち女官はすぐに察した。

彼女たちは同じ女官としての立場から、冷遇されている者に仕えることがどれほど大変なことかもすぐに理解したのである。

主の代わりに辛酸を舐めたこともあるだろうに、琳々にそれを感じさせる暗い陰りは見当たらなない。

一緒に仕事をすればするほどに、本当に尊敬に値する人物だと、小榮は琳々を評価していた。

それは小榮だけではなく、周囲の他の女官たちも同じであつた。だから皆自然と親しみと尊敬の念を込めて琳々姐姐とよぶようになったのである。

その琳々姐姐の頼みだから、なんとかしてあげたい気持ちは山々であつたが、
何しろ相手がちと悪い。

確かに近衛兵と女官が会いたければ正式に侍従を通して面会を申し込まなくてはならないが、そんなことをすれば当の本人たちが全く気にしなくても、噂はあつという間に尾ひれをつけて広まるであろうことは目に見えていた。

大丈夫ですよ、と言つてしまつたが、あらぬ噂が広まるのはあまり良くない。

しかし小榮は伊達に10年女官として勤めているわけではない。
頭の中の縁故関係をぐるりと見回すと、適役がすぐに見つかった。
ちようどよくたつぷり貸しもある。
当の本人である琳々には他言を禁じ、善は急げとすぐさま小榮は行動を開始した。

小榮と利靖君

小榮がまず連絡を取ったのは侍従の利靖君^{りせいくん}であつた。

利靖君は小榮と同じ時期に仕え始めたいわば同期とも言える存在で、少々惚れやすく、いつも小榮に恋した女官や侍女との橋渡しを頼んでくる。

以前恋の後始末をしてやったことがあり、それ以降小榮には頭が上がりないのであつた。

仕事が一と段落した頃合いを見計らつて、すかさず話をつける。

「利靖君、ちょっと頼みがあるんだけど」

「なんだよ小榮、お前が頼みだなんて明日は雪が降る……!」

「今までの借り、幾つか返してもらおうかと思つて」

ふふふ、と含み笑いながら詰め寄る小榮に、思わず利靖君は後ずさる。

しかし今まで小榮に借りはたつぷりあれど、貸しは無い。

つまり利靖君に拒否権は無かつた。

しかも幾つかということは、相当なお願いらしい。

「ちょっとヤボ用でさ、近衛の二番隊に顔良く人紹介してよ」

「二番隊!?　なんだよ、よりによつて一番面倒なところじゃねーか」

「だから頼んでるんじゃない。一番隊や三番隊なら別にあんたに頼

まなくてもなんとかなるし」

西殿の警備を担当しているのは近衛小隊の一番隊から五番隊までの5つの小隊である。

1つの小隊には20名から30名の兵が所属し、一日三交代で警護を行っている。

それぞれに個性があり、篤翼が隊長を務める二番隊は隊長の性格に似たのかよく言えば真面目、悪く言えばあまり融通の効かない者ばかりが集まっていた。

「まあ、なんとかしてやるけど……、二番隊に繋ぎつけてどうすんの。」

また他人の恋路の手助けか？ お前もよくやるなあ」

「そんなこという人にはもう文の渡しなんかしてあげてもいいよねえ」

「すいません、口が過ぎました」

慌てて謝る利靖君に小榮はまあ許してあげるけど、と凶悪に笑い、言った。

「これもいつこ、貸しだからね」

小榮に貸しを全て返しきる日は来ないかもしれない。

利靖君は心の中で震えあがったのであった。

そして小榮から事の詳細を聞いた利靖君は腕組みしながら唸った。

「そりゃいつその事、正式に面会しちまった方がいいんじゃないか」

「あんた人の話聞いてた？」

面倒な噂立てたくないから内密にしようとしてんじゃない」

脊髄反射のような速さで切り返す小榮にそうじゃなくて、しかめ面を作る利靖君は侍従の証しである肩までの長さのある髪を一つに纏め結びあげた頭に手を突っ込んで乱す。

この仕草をするのは何か言いにくいことがある時だと小榮は決して短くない付き合いの中で知っていた。

「……どうしたのよ」

じろり、と睨めつけると利靖君は観念したように話し始めた。

小榮に隠し事だの嘘だのついたら後が怖すぎる。

しかし全てを口にしてしまうことは憚られた。

「……男連中、特に中央の奴等から結構狙われてるんだよ」

今やこの王宮の時の人である新しい妃が唯一連れてきた女官である琳々は、妃と同じように注目されている。

しかし西殿は王宮の他の場所、特に貴族や王が執務を行う中央や官僚の部署がある北殿との繋がりは薄い。

琳々は真国へ来てから西殿の外へ出たことはないはずだから、中央に務める者達とはすれ違う機会すらない。

ではなぜ。

新しい妃である木蘭と琳々の二人は大陸の東側の民の特徴である真っすぐな黒髪・黒い瞳・象牙色の肌をしている。

異民族が珍しくない真国で黒髪の者は少なくはなかったが、そのほ

とんどは縮れたり大きくうねっていて、真つすぐな黒髪となめらかな象牙色の肌の両方を備えている者はかなり珍しい。

物珍しさから来たものか。

いや、珍しいから一目見たいというだけでは『狙われている』とは言わないだろう。

「中央の……」

眉をひそめながら呟くと小榮の頭の中で閃くものがあつた。この考えが正しければ利靖君が言い淀むのも無理はない。

木蘭が王との謁見の際、どうやって王への忠誠を示したかは一応伏せられていた。

しかし謁見の間にいたのは、国王陛下だけではない。どうやっても話は広がっていく。官僚や女官たち…そして王宮を警護する近衛兵の間で。

「妃様と同じ黒髪と象牙色の肌を味わってみたいわけね」

男って本当にどうしようもないわ。

小榮は大きなため息と共に冷たく言い放った。

欲望

年より若く見える外見や雰囲気からつい忘れがちだが、琳々は木蘭の乳姉妹であり、木蘭と同じ20歳だ。

真国の結婚適齢期も諸外国とほぼ同じ15歳から18歳である。

結婚の対象から外れる年齢の者に誘いをかけるということは、単なる遊びの場合がほとんどだ。

特に…… まともに顔も合わせたこともない女官に対してのそれは、ただ性の対象として見ていることがかなり多い。

この年齢まで結婚していないからそういうことに寛大な女だとも思ったのか。

馬鹿な男の考えそうなことだ。

真国はこの大陸では珍しい一夫一妻制だ。

それは男尊女卑の考えの強い他国よりも女性の地位が高いからである。

もちろんきちんと女性を尊重してくれる男が大多数。

しかし欲望に突き動かされる男も多いのが悲しいことに実状であった。

行きずりに、乱暴されることも無いわけではない。

王宮の内に仕える女官や侍女と近衛兵の接触が表立っては禁じられているのには血の気の多い兵士たちの過去の過ちのせいでもあったのである。

戦場では荒んだ心と身体を慰める女はいる。街にもしかるべきところにいけばそういう女はいる。

覚悟を決めてそれを生業に選んだ者ならばともかく、只の女官や侍

女にそれを求める男を愚かと断じることの何が悪い。

もう小榮は初心な小娘という歳ではない。

だがあからさまな男の欲望には、幾つになろうが正直女として嫌悪が先に立つ。

「まあ何度が頼まれたけどね……。面倒はご免なんで」

刺すような小榮の視線が痛い。肩を竦めつつ利靖君は答えた。

伝手を使って利靖君に橋渡しを依頼してくる者は新しい妃とその女官が西殿に住むようになってまだひと月足らずだというのに実はかなりの数であった。

両手ではぼちぼち足りない。

利靖君は女にはだらしがないが、西殿の侍従としては優秀であり、順調に出世の階段を上っている。危ない橋は渡らない。

真剣な恋の手伝いならともかく、火遊びの手引きなんぞ悶着の元だと今まで依頼を断り続けていたのであった。

そしてどうやらこれからも断り続けなくてはならないだろう。

利靖君は小榮は敵に回したくない。それだけの弱みをがっちり握られている。

「で、それがなぜ篤翼殿との面会を勧めることになるのかしら？」

「もうじき泰国へ遠征していた王太子殿下の軍が帰還される。

帰還後は軍の再編成があるだろうから、下手すると篤翼殿は西殿の小隊長ではなくなる」

「近衛から、国軍へ編入ってこと？」

「そういう話がちらほら聞こえてきてんだよ。元々篤翼殿は西殿務めじゃないからな」

西殿は王の妃と子が住む場所。

主である妃は永く不在であり、その子である現国王の2人の息子は成人して東殿へ居を移している。

すなわち守るものがない場所を警護する近衛兵团第一小队から第五小队に所属している者は戦場に置いてはおけない者が多かった。入団してまだ数年の若輩者、戦場では使い物にならないが除隊させることも出来ない貴族の坊々、そして戦場で負傷した者。

篤翼はかつて国軍の騎馬隊の大隊長であつたが2年前の戦で瀕死の重傷を負った。

彼の率いる大隊は「牙」と呼ばれる真国朱軍の主力中の主力である精鋭部隊だった。

怪我が無ければそのまま連隊長を経て今頃将と呼ばれる地位にいたであろうことはまず間違いない。

負傷した者は後備兵という予備の兵士扱いになり、一旦所属している部隊から離される。

怪我の程度によって回復後元の部隊に復帰するか、別の部隊に再配属されるか、退役するかが決められる。

篤翼は怪我が完全に癒えるまで、という条件で近衛兵团の預かりとなっていたのだった。

真国軍は大きく4つに区別される。

真国王直属の国軍と近衛兵团。

貴族たちが領地の民を招集して編成する地方軍。

今まで従えた国の民から編成される準国軍。

国軍と近衛兵団はその職務内容から全く違う集まりであつたが、国王直属という点では一緒であつた。

一般的に軍人と呼ばれる真国王直属の国軍と近衛兵団に所属する者たち。

国軍と近衛兵団、どちらにしても資格が必要で採用時はその資質を問われ、正式な訓練を受けなければ所属することはよほどの縁故や伝手がなければ出来ない。

軍人という職業は危険で厳しく、辛いものであつたが、希望する者は後を絶たない。

中級以下の貴族の嫡男以外の男子にとっては確実な自活の道であつたし平民にとつて己の実力だけで掴める手っ取り早い出世の手段であつたからである。

一方地方軍に所属する者達や準国軍の者達は平素であればそのほとんどが農民である。

地方軍を動かすということはその地にいる農民の労力を奪つことでもあり、むやみに動かすとその年の税収に響く。春や秋の農業にとつての繁忙期は特に。

軍といえばそのほとんどが地方軍と同じように自国の農民たちを招集したものである他国と比べて真国は国軍と近衛兵団という強力な職業軍人の集団を万人単位で抱えている。

これによつて真国は自国の生産力を落とすことなく戦うことを可能にしていたのであつた。

「篤翼殿は療養していた期間を含めるともう2年国軍から離れているからな。

そろそろ原隊に復帰する頃合いだろう」

「もうじきいなくなる人だから噂になってもかまわないってことね」

「ま、そういうこと。それに篤翼殿と琳々姐姐なら、根も葉もないってわけじゃないしな」

確かにこの二人には納得できる接点がある。

色恋沙汰に慣れていないと思われる琳々姐姐のために穏便な面会方法を考えていたが、ここは逆に噂を利用して他の不心得者をけん制した方がいいかもしれない。

顎に指をあて思案する小榮に利靖君は呆れたように言う。

「随分入れ込んでるんだな」

「……なんか、幸せになって欲しいんだよね」

祖国では不遇な暮らしをされていた新しい妃様。その妃様に仕え続けてきた琳々姐姐。

でも今の妃様には国王陛下がいらっしやる。

今すぐには無理でも、陛下は妃様を心から笑わせて、幸せにしてくれるはずだ。

だからできることなら、琳々姐姐にもそうなって欲しいと、思う。

「余計なお節介だったのはわかってるんだけどさ」

全く小榮はいつもそうだ。

周囲の人のことばかり気にして、自分のことは後回し。

だから利靖君は小榮に借りばかりが増える。

利靖君は小榮にそんなことないと、苦笑いを返すしかなかった。

悪だくみ

内向きに仕える女官が外に仕える近衛兵と正式に面会するには侍従を介してそれぞれの上司の了解を得ねばならない。

話し合った翌日から早速利靖君と小榮は動き始めた。

琳々の主は木蘭だが、この場合了解を取らなければいけないのは西殿の女官頭である。

さすがに女官頭は小榮のように誤解して驚いたりはしなかった。

何しろ理由が「旅を警護してくれたお礼」なのだから反対する理由はない。

「真面目ねえ」と苦笑いしただけであっさりと許可を出してくれた。

対する篤翼の上司は近衛兵団の西殿連隊長しゅくへい淑鄭寛と言った。

国軍の将を父に持っているというのに、戦嫌いで出世を全く望まない変わり者である。

実は利靖君は年齢はだいぶ離れていたが淑鄭寛とは仕事以外で付き合いがあった。

なぜなら彼は利靖君と同じで……少々どころかだいぶ女に惚れやすい。その絡みで何度か顔を合わせるうちになぜかすっかり仲良くなってしまうのだ。

日が暮れると利靖君は果実酒を手土産に淑鄭寛の宿舎を訪ねた。

大陸の東の特産である甘い林檎から作られる果実酒は淑鄭寛の大好物だ。

非番なのはもちろん確認済み。

「淑兄、黒髪の女官の話はどこまで耳に入っている？」

「……大層な人気らしいなあ。俺は好みじゃないが」

淑鄭寛は基本的に割り切って付き合えない女には手を出さない。

男女の仲に慣れた熟れた女にしか興味が無いのだ。そうでなければ彼は刀傷沙汰のひとつやふたつすでに起こされていてもおかしくない生活を送っている。

琳々がそんな女ではないこともすでに知っているのだろう。

利靖君は逆に年下の堅い女にしか興味が無い。だからいつも振られてばかりなのだが。

女の好みが全く違うから、仲良くしていられる。

「全く中央の連中には苛つくよ」

中央に仕える者、特に近衛兵は王の身近にいる自分たちは他の者と違うと驕っている部分がある。

だから簡単に西殿の侍従である利靖君に遊びの橋渡しを頼んでくるのだ。

血の気の多い奴らだからなあと淑鄭寛はからからと笑う。

「まあ、その女官が近衛に会いたい人がいるってさ」

「誰だそれ！」

淑鄭寛は途端に前のめりになって話を促す。

人の恋路を傍から眺めるのを楽しむ、淑鄭寛はそういう性質たちである。利靖君もよく知っているから、こういう切り出し方にしたのだ。

「篤翼小隊長だよ」

「あいつかー、そついや新しい妃様の護衛やらせたな」

堅物だと思っていたら意外とやるじゃないか。

淑鄭寛は楽しげにうなずきながら果実酒の杯を空ける。

やつと身を固める気になったんだなあと。

その言葉を聞いて、利靖君はある噂を思い出す。

「やっぱりあの話本当なのか？」

結婚させようとして西殿に放り込んだってやつ」

「本当。朱軍の張將軍ちやうから言われてな。

じゃなきゃ西殿なんかにはちともつたいない男だよ」

淑鄭寛は事もなげにあつさり肯定した。

国軍は率いる者の軍旗の色で区別されている。

王太子の軍は朱、第二王子の軍は蒼、そして真国王の軍は黄である。篤翼は負傷するまで朱軍の精鋭が集まる騎馬隊の大隊長であった。

大隊長と小隊長、いくらも違わぬように思えるが、国軍と近衛兵団ではその規模が違う。

近衛兵団の小隊長が率いる人数はせいぜい30人。対する国軍の大隊長は1000人を超える場合もある。

いくら負傷して後備兵となったとはいえ、今の身分では釣り合わない。

「身を固めて、待つてる者がいりゃ、また戦い方も変わるだろうってさ」

篤翼はよほど己を顧みない戦い方をしていたのであろう。

多くの兵を率いる長たる職に就ける者はそう多くない。
簡単に死んでもらっては困るというのが、上司である將軍の本音と
いうところ。

だからわざわざ一番若い女官や侍女が多くて仕事が暇な西殿務めに
されていたのだ。

よりどりみどり、綺麗どころが集まっていると有名でもあった。

「まあ結局お眼鏡に適う女はいなかったみたいだな」

淑鄭寛はからからと笑いながらまた果実酒の杯を空けた。

艶やかな黒髪やなめらかな象牙色の肌に触れてみたい。

淑鄭寛は利靖君とて男であつたから、小榮には申し訳ないが中央の
連中の気持ちかわからなくは無い。

しかし興味本位で女に触れることがどういつ結果になるかわかつて
いたから行動に移そうとは思わないだけだ。

「そのままくつついちまえばいいなあ。篤翼のやつ別に黒髪嫌いとか
じゃなかったし」

花街に連れていっても、篤翼は相方の容姿を指定などしなかった。
それに彼は相方に一定の敬意と報酬に相応しい態度を求めるだけで、
執着はしない。

「悪い男じゃない。手に入れた女は大事にするだろうよ」

「だろうな。淑兄とは違つて」

からかう様に口の端を持ち上げた利靖君に、違いない、と淑鄭寛は

笑いを返した。

午睡

篤翼は負傷して一線から離れたとはいえ、元は朱軍の精鋭に数えられていた男である。

傷が癒えて西殿に務め始めた頃、女官や侍女さらに下女たちに至るまで、

かなりの数の女たちの熱い視線を集めていた。

その視線に気がつかない程篤翼は鈍い男ではない。

しかし篤翼は視線にわざと気づかないふりをした。

あからさまな誘いもささやかな誘いもなにからなにまで断り続けた。

徹底的にやったおかげでやっと、身边は静かになった。

そのせいで今は立派な変人扱いではあるが。

女が嫌いなわけではない。

ただ、女という存在をどう扱っていいかがわからないのだ。

14歳の時国軍の一員と認められてから、篤翼は常に戦の中にいた。馬を駆り、剣を振るい、敵を殺す日々。

気づいた時には20代も半ばをすぎ、すでに適齢期の娘を伴侶として迎えるには少々年を取り過ぎていた。

結婚という目的を持って近づいてきた者たちはわかりやすかったけれど、

彼女たちが求めている理想に自分が近いとは篤翼にはどうしても思えなかった。

自分よりももつと将来がある若人と結ばれた方がいいだろう。そう思うと、断り続けるしかなかったのである。

中には結婚を目的としない女たちももちろんいた。

しかし篤翼は男の欲望を発散するためだけに女を口説くことはどうしてもできなかった。

長い従軍生活で血に狂って略奪や暴行に奔る者を何人も見てきた。真国軍では戦場での略奪等の行為は厳罰に処される。すなわち死である。

一時の感情で全てを無くす者たちを見ていて、自然とそれを抑える術を身に着けてしまったためか。

それとも凌辱され泣き叫ぶ力すら無くして茫然と空を仰ぐ女を何人も見たせいだ。

自分でも要領が悪いなと思わなくもない。

据え膳を食わぬ意気地なし、とまで言われたこともある。

しかし長い時間をかけて形成された性格は、なかなか変えられるものではない。

次男である自分は継ぐべき家があるわけでもない。

すでに篤翼は伴侶を求めることを諦めていた。

上司であった將軍には結婚したら連隊長にしてやる、とまで言われたが、

出世のためだけに結婚するのはどうにも性に合わないのだから仕方が無い。

西殿の広い庭園の中には、幾つもの東屋が点在している。

その内のひとつに茨にすっぽりと覆われて外から中が見えないものがあり、

篤翼はその場所に度々訪れていた。

ひとりになるために。

篤翼にとって香緋を茨の東屋で飲むことは、騒がしい西殿務めの慰めであつたのである。

しかしその日、いつものように水筒に自作の香緋を詰め、東屋に行くとなんと先客がいた。

一見するとただの茨の木に見えるこの東屋で、人に会つたのは初めてであつた。

先客は茨の作る日陰の中、気持ち良さそうに微睡んでいた。さらりと風がその人の艶やかな髪を揺らす。

先客は黒髪の女官、琳々であつた。

琳々は東屋の柱にもたれ掛かるようにして眠っていた。

女性の寝顔を見ることが許されるのは、家族か……恋人だけである。

ここは黙って立ち去るのが礼儀だろう。

篤翼は踵を返しかけたが、あまりにも無防備な寝顔にふと心配になる。

周囲から見えづらい茨の東屋は絶好の隠れ家であつたが、逆に悪事を働いても見つかりづらいということでもある。

自分以外の近衛兵が見たら、悪戯心をおこすものもいるだろう。かといって気持ちよく眠っているものを起こすのもしのびない。

仕方なく篤翼は琳々の横に腰掛けた。
少し湿り気のある風が、頬を撫でる。
この風が吹いて少しすると、真国首都或範のある地域は
1年で一番雨が多い時期がやってくる。
それが終わると本格的な夏が来るのだ。

見るともなしに篤翼は琳々の顔を眺めた。
近衛兵の間に巡った噂で聞きかじった年齢は、すでに20歳を超えているという。

初めて会った時にはとてもそんな年齢だとは思えなかったが、
黒く円つぶらな瞳が閉じられている今は、年相応に見えた。
伏せられた睫毛。滑らかな象牙色の肌。桃色の頬。艶やかに光る黒髪。

他の男たちが騒ぐのも無理はないかもしれない、と篤翼は思った。
いくら多民族が暮らす真国であってもここまで東の民の特徴を
顕著に備えている者は少ないからだ。

でも、なんだかこんな風に眠っている姿は、琳々ではないようだな
んとなく落ち着かない。

篤翼の知る琳々は表情がころころ変わる、憎めない笑顔が眩しい娘
であり、

今目の前で気持ち良さそうに眠る琳々の表情は、篤翼が初めて見る
ものだった。

遊び慣れている男からすれば、女の寝顔など大した価値を持たない
かもしれない。

だが篤翼にとっては、琳々の秘密を覗き見をしているようで、
なんとなく居た堪れなかった。

「……そうだ、香緋を飲みに来たんだった」

誰かに言い訳するようにひとり呟くと、水筒から茶器に香緋を注ぐ。だいぶ温くなってしまっている。味なんてちつともわからない。

息抜きにこの東屋に来たつもりだったのに、ちつとも息抜きになっていない。

それどころか妙に緊張してしまっている自分に篤翼は苦笑する。女の寝顔ひとつにこれだけ動揺してしまうとは、もういい年だというのにみつともない。

今度の休みは花街にでも行った方がいいかもしれない。

黒髪の女はいるだろうか。

ぼんやりとそんなことを考えて、はた、と気づく。

今、俺は一体何を考えた？！

頭を過った下世話な想像を振り払うように、篤翼はぶるぶると頭を振った。

陰り

不意に風が茨の隙間をぬけて、琳々の髪を徒に乱した。
ふわり、と揺れた髪の一筋が僅かに開いた唇に引っかかる。

「んん……」

それがくすぐったかったのであろうか、琳々は身動きすると、もぐもぐと口を動かした。

引っかかった髪をそのまま食べてしまうように。

いけない。

どうしてそう思ったのか。

気づいたときには篤翼は手を伸ばしてなぜかその一筋の髪を払っていた。

ささくれた指の腹が、肌に触れる。

見たとおりの柔らかな感触が指から伝わると、まるで焼けた石に触れてしまったように

篤翼は反射的に手を引いた。

その自分の行動が理解できなくて、篤翼は肌に触れた手をまじまじと眺めた。

幾重にも硬い胼胝が出来た、剣を握り槍を振るい手綱をひく軍人の手だ。

気安く女性に触れることが許される手ではない。

「なにをしているんだか……」

篤翼はため息と共に自嘲気味に呟くと、今だ気持ち良さそうに眠る琳々の肩を掴むと優しく揺さぶった。

名前を呼びかけるとまた口の中でもごもご何か言葉にならない言葉を紡ぐ。

「琳々殿」

心持ち、先ほどもより大きい声で呼びかける。

最初から、起こしてしまえばよかったのだ。

女性が無防備に屋外で昼寝などするものではないと。

「…うん……」

鼻を鳴らすような声を漏らすと、琳々はようやく瞼を上げる。

そして眼前の篤翼を認めて一気に目が覚めたように、

弾かれたように身を引いた……途端、寄りかかっていた柱に大きな音を立てて頭を打ちつける。

「痛ったあ……」

「大丈夫ですか」

「は、はい……」

「こんなところで昼寝していると、風邪をひいてしまいますよ」

「すみません……。風が心地よくてつい……」

穏やかな日差しに柔らかな風。確かに午睡を誘うには十分だ。

肩を竦ませて小さく謝罪を繰り返す琳々は、もういつもの様子で。その姿に心は落ち着いたけれど、ほんの少し、もったいないとも思

った。

「あ、あの篤翼殿はどうして……」

当然の問いかけに、篤翼は傍らに置いてあった香緋入りの水筒を持ち上げると軽く振って見せた。

「いい天気だから、外で香緋を飲もうと思ひまして。ここ、いいでしょう。」

ちようどよく茨が日差しを遮ってくれる」

「そうですね！ 私もこの東屋を見つけた時、秘密の場所みたいだっと思ってたんです」

暗闇に急に光が差し込むように、琳々は笑う。

「お茶を楽しむにはいい場所ですが、ひと眠りにはちょっと向かないでしょう。」

女性が屋外で無防備な姿を晒してはいけない」

篤翼が苦笑しながら危ないですよ、と告げると

琳々は恥ずかしそうにまた小さくすいません、と呟いた。

きつと琳々は自分も男で危険だなどと露ほども思っていないんだろ
う。

愚にも付かぬことが頭を過る。

琳々が篤翼に親しげに接してくるのは、旅の同行者であつたからだ。
ほんの少しの親切が、交わりの過去が、今の二人を繋げるもの。

「それにしてもよくこの場所を見つけましたね。ここで人に会った

のは初めてですよ」

茨の東屋は西殿の庭園の隅にひっそりとある。建物からは遠く、通路から外れ完全に死角になっているし、柱と屋根はぐるりと茨に囲まれている。

一見してそこに東屋があるとは全く気づかないはずだ。

「散歩していてもまた見つけたんです」

「この辺りを散歩ですか」

茨の東屋の周囲は建物から遠いせいかあまり手が入られていない。作られた時に配置されたであろう草木が茂るのみで花壇もなく、散歩するに適しているとは言い難い。

「……あまり人がいないところがよかったです」

呟いた琳々の顔には、似合わない苦笑が浮かんでいた。
新しい妃と同じ、黒い瞳と髪、象牙色の肌。

木蘭に直接仕える女官や侍女たちはとくに琳々を受け入れてくれているが、
そうでない者たちからは未だ注目されるのであろう。

「……お気持ちはお察しします」

黒髪の女官の噂は西殿に留まらず、王宮の隅々にまで広まっている。

「私は特別でもなんでもないのですけれどね」

ため息とともにいついて出た一言に、隠し切れない心情が滲む。

琳々は自分の外見が人目を引くとは全く思っていない。

慶国、大陸の東の国々においてはごくごく普通、十人並みである。黒い髪も瞳も、肌の色も、当たり前前に皆が備えているもの。

それが異国に来た、それだけでこつも注目されるものだとは思ってもよらなかったのだ。

そして心を乱すことは一人歩きする容姿に関する噂だけではなくた。

秘められた想い

琳々は自分よりも年上の女官たちから尊敬の念を込めた「姐姐」と呼ばれるたびに

感じる強い違和感を持て余していた。

皆、自分のことを思い違いしている。

物心ついた頃から仕えている木蘭への忠誠は誰にも負けはしない。

確かに誰よりも木蘭の側にいて、誰よりも木蘭のことを知っている。真国に来るまでは、何があろうと木蘭の側を離れるものかと思っていた。

自分だけが、木蘭の支えであり、手足であると自負していた。

しかし木蘭が自らの力で真国での地位を獲得し、妃と認められ扱われるようになった今、

琳々の存在意義が揺らぎはじめたのである。

真国の女官や侍女たちから疎まれていくわけでは決して、ない。

寧ろ慶国での木蘭の処遇に気づいた彼女たちは不遇な主を持った琳々に同情し、

誠意を持って接してくれる。

今までは大変だったでしょう。

でもこれからは私たちもいるのだから、頼って、任せて。

口に出しはしないけれど、皆態度で示してくれるのだ。

皆いい人たちばかりだ。

慶国の後宮で女たちのくだらない争いや苛めを散々見てきた琳々に

は信じられないくらいに。
だからこそ、心を侵しはじめた。

ずっと私だけの木蘭様だったのに。
私には木蘭様しかないのに。

なんと愚かな独占欲。

西殿の女官たちが木蘭を大切にすると同じように
琳々に敬意を持って接してくれるたびに、澱のように心には何かが
降り積もっていく。

木蘭が陛下のために衣装を選ぼうとしたときだって、何の手助けも
出来なかった。

真国に来てからの自分は何の役にも立てない。

たくさんの者の手で磨かれ、敬われ、そして王に愛されるのだろう。
望むことを忘れた木蘭が、強く望んでいることを木蘭本人ですらま
だ気づいていない。

しかし、琳々だけにはわかった。

誰よりも誰よりも、木蘭のことを理解して、傍にいて、見つめてき
たのだから。

木蘭には琳々しかない。

そのことが琳々にとっての全て。

木蘭にとっても、それは同じはずだった。

けれど真国にやってきて全てが変わった。

今まで休みなんて無かった。木蘭の世話をする者は琳々しかいなかったから。

しかし休み無く仕えていたことを何気なく口に出した途端、周囲の者たちは琳々の手からあつという間に仕事を奪っていった。

そして与えられた休日。

「木蘭様のことは任せて、ゆっくり休んできて！」

小榮は片目を瞑って琳々を職場から追い出した。

しかし今まで休みらしい休みを取ったことが無い琳々は自室以外に行き場所も無く、

またどう過ごしていいかもわからず、人がいない場所を探して庭園を彷徨ううちに

この茨の東屋を見つけたのだ。

自分だけの居場所を求めて。

不思議なものだ。

篤翼も琳々も居場所を探し、人目を逃れてこの茨の東屋に辿りついた。

もしかしたらこの場所は偶然に出来たものではないのかもしれない。あまりにも巧妙に、茨は東屋を覆っている。まるで何かを隠すように。

今の自分たちと同じ気持ちだった者がこの王宮にかつて住んでいたのだろうか。

「……時間が解決しますよ」

変わり者に徹するという劇薬も必要ではあったが、篤翼にとって時間という薬は有効だった。

琳々が周囲から浮いているのは今の段階では外見のみである。

ならば皆が見慣れるまで

関心が薄れるのを待つしかない。

その間注がれる視線はとても居心地の良いものではないであろうが。

元朱軍騎馬隊の大隊長であつた自分と、

東の国からやってきた、珍しい黒い髪と瞳、象牙色の肌を持つ女官。

どちらも西殿^{ニシノミヤ}では異質な存在だ。

「……ならいいのですけれど」

琳々の声はまだ重い。

伏せられたまつ毛の震えるさまが、篤翼の心を揺さぶる。

この娘に、そんな姿は似合わないと思う。

けれど今まで見てきた姿も憔悴した今の姿も、

琳々であることに変わりはないのだ。

羞恥に真っ赤になった顔。

香緋を差し入れた時の驚いた顔。

弾けるような笑みと、明るい声。

そして悲しそうな、疲れた表情も全て。

もっと、違う姿も見たい。自分だけに、見せてほしい。

庭園で警備をしながら名前を呼ばれた気がして、振り返ることは何度もあった。

空耳は願望の裏返しで。

いつの間に。

篤翼は己に問いかける。

無防備に眠る素顔を見たときから？

あの時風になびく黒髪を見たときから？

それとも日の光に煌めく簪が目に入ったときから？

心の中から湧き出る激情を隠しながら、篤翼は優しく言葉をかけた。

「何か心に重しがあるのなら、口に出した方がいいですよ。

感情を発散させるには声を出すのが一番です」

言外に話してみるように促すと、琳々は軽く頭を振ると困ったように呟く。

「篤翼殿にはいつもお願いばかりしてしまいますね」

「そんなことはありません」

篤翼の言葉に安心したかのように、琳々は望みを口にした。

「たまに、ここで、こうして会うことは……ご迷惑ではないですか？」

「誰にも知らなければ、かまわないでしょう」

琳々は近衛兵と女官と一緒にいるのは好ましくないとすでに知っているから

誰にも知らなければと答えた篤翼の隠された気持ちには気づいていないだろう。

また会いたいと、願っているのは、琳々だけではない。

むしろ、より強く思っているのは、願っているのは、篤翼のほうだ。

他の誰にも知られたくない、秘密の場所の約束はまるで禁じられた逢瀬の約束。

「ありがとうございます」

礼の言葉と共に、琳々にやっというものの笑みが戻る。

その姿に篤翼も微笑みを返していた。

10日後にこの場所だと改めて約束をすると、琳々は腰を上げた。一緒に並んで歩くことは出来ないから、先に誰かがこの茨の東屋を出なくてはならない。

「今度会える日を、楽しみにしています！」

去っていく琳々の後ろ姿を、篤翼は見えなくなるまで見送った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1265q/>

琳々と篤翼

2011年3月1日13時51分発行